

本日の学び:「回復の預言」 テキスト:エレミヤ30章1-3節、18-22節

【理解の手がかりとして】

本課のテキストは30章。前回と同様に、前課との間の部分につき、内容を押えておきたい。

- 24章 捕囚に服する「良いいちじく」と服さない「悪いいちじく」
- 25章 70年間の捕囚の預言。その後に来る諸国民へのさばき。
- 26章 エレミヤ、神殿説教の結果捕らえられ、危うく死を逃れる。
- 27-28章 エレミヤ、「軛」によって捕囚の神意を示し、反対者ハナンヤに勝つ。
- 29章 エレミヤ、手紙によってバビロンの民に同じ神意を伝え、偽預言者を批判。

以上 浅見定雄氏著『旧約聖書に強くなる本』より引用。

さて、本課のテキストに入ろう。エレミヤ書30-33章は「慰めの書」と呼ばれる。その序文と言われる30:1-3の中に、「繁栄を回復する」(30:3)とある。そしてそれと同じ句が18節にも登場する。今課のテキスト(30:1-3、30:18-22)は、その「繁栄の回復」を共通とする箇所が選ばれている。

エレミヤはここでこれまでとは語調を変え、〈救済〉を語り出す。その救いとは、4-7節にある「戦慄」「恐怖」「災い」「苦しみ」を経験した末に訪れるもの、「産む」(30:6)になぞらえれば陣痛の苦しみに似た苦痛を経た解放である。その解放の様子が「軛を砕き」「縄目を解く」「再び…奴隷にすることはない」(30:8)と告げられる。※「軛」とはバビロンに囚われること。この軛からの解放を、他の預言者たち(ハナンヤのような)も説いたが、エレミヤが説いたその軛の期間はより深刻であった。

11節の「わたしはお前を正しく懲らしめる。罰せずにおくことは決してない」(30:11)に注目。エレミヤの説く〈救済〉には、神の民(ユダ)への主の裁きが避けられないものとしてあり、それがバビロン捕囚の経験であったこと、しかし一方、その経験を通らせながら、決して「滅ぼし尽くすことはない」(30:11)こと、これが神が「共にいて救う」(同)ことの証である。

12-17節の部分には、ユダの民が負った「傷」の深刻さが数えられている。しかしその傷は主が与えたものである。「お前の悪が甚だしく、罪がおびただしいので、わたしがお前にこうしたのだ」(30:15)とあるとおり。そして続く。「さあ、わたしがお前の傷を治し、打ち傷をいやそう」(30:17)と。傷を与える(裁く)方も主なる神、傷を癒す(救う)方も主なる神、なのである。※これは、先日の小林特伝の「闇が光る」と主題を等しくするものである。

さて、18-22節において、「繁栄の回復」(30:18)が再び告げられる。都と城壁の再建(30:18)、そして喜び歌う音と子孫の繁栄(30:19)、それは「昔のよう」(30:20)であり、こうして新しく礼拝する共同体が神の御前に再編される、という。

21節では「ひとりの指導者」(30:21)の台頭が告げられる。「彼のほか、誰が命をかけて、わたしに近づくであろうか」(同)とあるとおり、この指導者は自らの命の危険を顧みず、身を賭して神の御前に立つ人物である。そしてその行為によって開かれる救いの世界が語られる。その指導者の行為の目的は次の通り。「こうして、あなたたちはわたしの民となり、わたしはあなたたちの神となる」(30:22)である。

「この仲保者像は、『人類の歴史はじまって、ただひとりしか存在しない』方をはるかに指し示す。そして

われわれに『希望のつきぬ火』を絶えずともす。」(『左近淑著作集 別巻 聖書研究』より)——この言葉は、次なる聖句を想起させる。——「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。」(ヨハネ1:18)「命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。」(ヨハネ1:4-5)

『聖書教育』より

- 「滅びるのは神さまの裁きではありますが、それが目的ではない…神さまはイスラエルを背信から救い出して、再び神さまとの契約を結ぶことを望んでいます。」(聖書の学び～繁栄を回復する日が来る)
- 「この(繁栄の)回復はイスラエルが自分で行うことではなく、神さまによってなされます。…イスラエルの神殿や人口の回復は、民の神さまへの信仰の回復もなければなりません。」(聖書の学び～回復の姿)
- 「回復されるイスラエルに『ひとりの指導者が彼らの間から』出ます。…その指導者に求められている役割は、神さまと民とを結びつける仲保者的役割です。…『あなたたちはわたしの民となり、わたしはあなたたちの神となる』この関係に私たちも入れていただくために、エレミヤの次に命をかけてくださる方が待たれます。」(聖書の学び～指導者が彼らの中から出る)